

第2節 サブカルチャーによる授業開発論—今後の可能性を探る

1 読解授業の伝統的な形態を超えて

魅力ある教材の開発が求められるのと同様に、魅力ある授業を開発し創造することはきわめて重要である。本研究が「授業開発」を主たるテーマとしたのは、国語教育研究の大きな目標が「明日の国語の授業をどうするのか」という現実的な問いに答えることであるという思いに基づく。本研究では、学習者の身近な場所にあるサブカルチャー教材を取り上げつつ、常にその教材をどのように扱うのかという授業実践に関わる問いを問い続けてきた。本節ではその総括を兼ねて、今後の授業開発の可能性および課題を明らかにしたい。

繰り返し言及したように、様々な批判を受けながらもなお、「読んで、説明して、分からせて、暗記させる」という読解授業の形態が国語科の主流を占めている。教室の構造自体が黒板に対してすべての学習者が向き合う形になっていることからして、すでに教師主導型の伝統的な授業形態を前提とした空間が成立していると言える。教科書教材もその多くは読み教材である。高等学校や大学の入学試験問題は、相変わらず読解問題を中心に出题される傾向にある。

読解授業の多くは教師の講義による一斉授業となり、教室では教師から学習者への一方的なメッセージ伝達を中心とした教師主導型の授業が展開される。教師からのメッセージをひたすら受信し続けるという受動的な対応が学習者の側にも定着して、彼らは主体的に授業に参画しようとしめない。発問をいろいろと工夫して意見を求めても、彼らの姿勢は一貫して消極的なもので、授業は活性化する兆しが見られない。定期試験の結果に基づく評価は、暗記中心の学習を助長する。そこには、国語科に対する主体的な興味・関心が育まれる余地がない。

このような国語科の授業の傾向を克服するために、多様な試みが続けられてきた。現場担当者の努力と工夫から、優れた実践が生み出されている。ただし全体的な傾向としては、読解中心の教師主導型授業が教育現場に深く根付いていると考えざるを得ない。本研究で提案する「授業開発」の目指すところは、この「制度」のように定着した授業形態を根本的に見直して、学習者にとって「楽しく、力のつく」授業を追求することにあつた。

本研究においては、国語学習に対する学習者の興味・関心をいかに喚起するかという問いを常に問い続けてきた。授業の開発はそこから出発する。そもそも、国語教育における指導目標をどこに置くべきなのであろうか。その点について本研究で主張してきたことを改めて整理すると、次のような目標としてとらえることができる。

- ① 国語学習に対する学習者の興味・関心、および学習意欲を喚起する。
- ② 学習者の授業への主体的な参画を促進し、個性と主体性を育てる。
- ③ 実の場での言語活動を通して、コミュニケーション能力を育成する。
- ④ 個々の学習場面を通して課題発見力・学習計画力・情報活用力などを身に付け、自己学習力の伸長を図る。
- ⑤ 教師と学習者間でのメッセージ伝達のみでなく、個性あるクラスという集団の中に生成する「教室の文化」を生かして、双方向のメッセージのやり取りを通じた学習の

深化を達成する。

⑥ 自己評価・相互評価の積極的な導入を図り、総合的な国語学力の評価を実現する。

これらの目標の中では、やはり第一に掲げた興味・関心・意欲の喚起という点が最も重要である。サブカルチャー教材開発の意味は、主として学習者の興味・関心の喚起という目標にあった。開発した教材を効果的に扱ってこそ、授業の効果は期待できる。加えて、第五に掲げた、「教室の文化」の活用という点も国語科の授業に積極的に導入すべき課題と言えよう。すなわち、教室には多様な個性を有する学習者の集団が存在する。そこに自ずと生成する「文化」状況を、授業において有効に活用することが求められる。教師から学習者へという一方のメッセージ伝達ではない、学習者相互の双方向的なメッセージの交流を通して、新たな学びが実現する。本研究で紹介した授業実践は、多くが「教室の文化」を生かしたコミュニケーションを基盤としたものである。

2 総合性・関連性を生かした授業の構想

本研究で取り上げてきたサブカルチャー教材を扱う授業は、一つのあり方として総合性・関連性を生かすという方向で構想されてきた。総合的・関連的な扱いを通して、サブカルチャー教材の教材価値はより高いものになる。そこで続けて、総合性・関連性を生かした授業の構想について言及する。以下に主として高等学校での実践に即して、具体的な「総合・関連」の方法を提案したい。

① 科目の総合・関連

「古典（古文・漢文）」と「現代文」とを関連させて扱うという方法である。1999年版高等学校学習指導要領では「国語総合」という総合科目が設けられているが、現場では「古典」と「現代文」を別個に扱うという方向性が定着している。かつて「国語Ⅰ」が発した当初は主題単元における科目の総合を図る動きが出て、科目の融合が模索されたが、主題によって教材の多様性を矮小化してしまうという危惧と、高度な古典読解の知識を要することから、現場に定着することはなかった。

② 領域の総合・関連

新学習指導要領における「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」「言語事項」の各領域・事項を総合的・関連的に扱う方法である。この方法は広く現場に取り入れられている。

③ 教材の総合・関連

異なるジャンルの教材を組み合わせるという方法である。例えば、文学教材と論説教材、散文教材と韻文教材、文字教材と視聴覚教材、教科書教材と自主教材、言語教材と漫画・アニメーションなど他メディアの教材などを組み合わせることで、効果的な授業実践を目指すことになる。

④ 学習形態の総合・関連

個別学習、一斉学習、グループ学習などの学習形態を、組み合わせるという方法である。

⑤ 活動の総合・関連

2007年現在実施の学習指導要領で言語活動例が示され、たとえば「国語総合」の「話

「話すこと・聞くこと」の領域では、スピーチ・説明、報告・発表、話し合い・討論の活動が具体的に提示されている。まず「スピーチ」を聞いて、その内容をめぐって「討論」を展開するなど、活動を総合的・関連的に取り扱うという方法を工夫することができる。

その他、国語科以外の教科との総合的・関連的学習なども含めて様々な方向性があり、それらをさらに総合し関連付けながら、多様な学習が展開されている。以上のような方法を年間指導計画、単元の指導計画の中に明確に位置付けながら、効果的な授業を展開するようにしたい。特にサブカルチャー教材を扱う授業では、先に示した「総合・関連」の方法を組み合わせるなどの工夫が求められる。

そこで総合的・関連的な学習の授業のモデルとして、高等学校1年の教材として広く用いられる芥川龍之介の「羅生門」の授業を取り上げる。この教材は、古くから小説教材の「定番」として多くの教科書に共通して採録されてきたことから、多くの教材研究や実践報告がある。それらの先行研究に十分な目配りをしたうえで、「総合・関連」の趣旨を生かした指導計画を検討してみたい。

授業は、大きく前半と後半に分ける。前半は教師主導型の一斉授業で、教材の要点を整理して扱う。場面の展開、登場人物の心情の推移、作中における背景の意味、特徴的な描写の分析などを、整理して取り上げる。授業は、本研究で繰り返して紹介した「研究の手引き」「授業レポート」を毎回使用しつつ、教師からの一方向的なメッセージ伝達のみにならないように配慮する。特に一時間の授業の中で、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域の「総合・関連」が効果的に実現できるように留意する。

後半の授業ではグループ学習を導入して、前半に学習した要素を生かした学習者主体の活動を展開する。各グループで研究テーマを分担するが、その中には「今昔物語集」と比較という「古典」と「現代文」の「総合・関連」に関わるものも含めるようにする。サブカルチャー教材の要素を含めることができれば、研究テーマの中に「映像化」や「テレビゲームの企画書」などの研究課題を組み込むことができる。そしてグループ学習の成果は発表という形でクラスに還元する。教師による学習の総括を経て、発展的な読書につなげるために「藪の中」を紹介し、黒澤明監督の映画「羅生門」の一部を鑑賞する。これは一般的な指導過程ではあるが、自然な形で総合的・関連的な学習の要素を取り入れている。

総合的・関連的な学習を展開する際には、常に指導目標を明確にして、どのような国語の学力育成を図るのかを教師と学習者がともに把握できるように心がける必要がある。また、個々の授業における学習指導案、単元や年間指導計画、さらに教科や学校の指導方針などに配慮して、それぞれの場面において効果的な学習を展開するようにしなければならない。学習の趣旨を生かした評価を工夫することは言うまでもない。

大切なことは、無理な総合・安易な関連は避けて自然な形での実践をすることである。「総合的な学習の時間」との効果的な連携をも視野に収めつつ、国語科の他の教師、他教科の教師や図書館司書など、指導者側の連携も強化したい。そして授業を成功させるためには、教師自身が常に研鑽を積んで視野を広くし、様々な状況の変化に対して柔軟な対応ができるようにしておく必要がある。

3 グループ学習の重要性

サブカルチャー教材を用いた授業を展開する際に、グループ学習の形態を取り入れることが特に重要である。本研究で紹介した授業は、多くはグループ学習の要素を含むものであった。それは、先に触れた「教室の文化」を生かすために、学習者相互のコミュニケーションを重視することでもある。特にサブカルチャー教材は学習者の身近な場所にあることから、教師からの一方向的なメッセージ伝達の形態よりも、学習者が主体となるグループ学習の形態の方が馴染むことになる。

グループ学習においては、個人レベルの学習をグループレベルで検証し、さらにクラスレベルの学習を通して再度個人へとフィードバックするという学習の流れを、「教室の文化」を有効に活用する方法として活用したい。ここで第5章の第1節で取り上げた「歌詞」に関連して韻文の教材を用いた授業をモデルとして述べると、次のような指導過程を構想することができる。

まず詩の授業ではまず教科書教材を取り上げて、その読み方を紹介する。解釈を示すよりは、読みの観点についてポイントを絞って紹介するようにしたい。次の段階では図書館を使用して、学習者が自由に詩集を読むことができるようにする。この学習に備えて、司書と協力して学校図書館にあらかじめ主な詩集を用意しておく。学習者が詩集を手にとって自由に読み味わう時間を、授業中に設けることにする。なるべく多くの詩に接して自分の感性から詩を味わい、好きな作品を発掘する。授業時間以外にも可能な限り多くの作品と接する機会を持つように指導する。好きな詩に出会うことができたら、ノートにその作品を写すようにする。その後で、特にどのような点がよいと思うかについてメモしておく。

個人レベルの学習において好きな作品を選ぶことができれば、次にグループ学習の形態を導入する。5人前後のグループを編成して、個人で選んだ詩を自由に交換する。一度グループ全員でそれぞれの持ち寄った詩を読んでから、メンバーがその作品について自由にコメントを交流する。一通りコメントを聞いてから、グループでメンバーが選んだ作品をめぐって話し合いをする。そしてグループとして推薦する詩を一編に絞る。話し合いの結果、メンバーが選んだ詩以外の詩を選んでもよいことにする。グループで選んだら、その詩について発表する準備をする。発表はその詩の朗読、もしくは群読を必ず含めることにする。朗読の際には、グループでBGMを選んでその曲を流しながら朗読するなど、作品に適した方法を工夫する。その後で、ことばの注釈を含めて作品を鑑賞するための情報を整理し、作者についても重要な点に絞って簡潔に紹介する。グループでA4サイズ2枚程度のレジュメを用意して、1枚には選んだ詩を写し、もう一枚にはことばの注釈や作者解説などを掲載する。レジュメは印刷して発表の際にクラス全員に配布する。

グループ学習の成果は、作品の発表会という形態でクラス全体に還元する。こうして個々の学習者が出会った作品を教材とした学習を展開することによって、詩に親しむという雰囲気を作ることにしたい。この授業では、教師もまた新たな作品と出会うことができる。各グループで作成したレジュメは、そのまま綴じるだけで詩のアンソロジーが完成する。それをさらに学年や学校単位で冊子にして、学習者が選んだ詩集の発行を検討したい。

詩とともに短歌や俳句も、詩に準じた指導過程によって扱うことができる。導入としての一斉授業から出発し、まず基本的な鑑賞の方法について、教科書に収録された作品を通して紹介する。この段階で、短歌・俳句の修辞に関しても扱うようにする。続くグループ学習では、教科書の作品を分担して調査・研究するという活動を含めることにする。図書

館の参考文献を充実させて、与えられた教材に関する調査の際にも、また学習者自身が教材を選択する際にも参考に資するようしておきたい。教科書教材をグループで分担して調査・研究を展開し、その成果をまとめてクラスで発表する。発表の際には、詩と同様に朗読もしくは群読を必ず取り入れるようにする。

短歌・俳句を教材とした授業では、作品に関する研究発表に加えて、学習者の表現活動へと展開することも工夫したい。短歌の場合には、鑑賞した後でその作品の世界を詩の形式によって表現してみる。さらにその作品のイメージにふさわしい風景を探してデジタルカメラによって撮影し、写真に詩を添えて発表を工夫すると、本研究で扱った言語と映像の問題にも触れることができる。作品のイメージに合致するBGMを選んだり、写真によって風景を撮影もしくはイラストによって描いたりするという方法によって、音楽や絵・写真とのコラボレーションを試みる事が可能である。

俳句の場合には、俳句を英語に訳したものを紹介し、また学習者に実際に英訳をさせてみる授業も考えられる。英語科の協力が得られれば、国語科と英語科という、教科を越境した総合的な学習へと発展させることができよう。

短歌・俳句ともに、実作を試みることによって、それぞれのジャンルにふさわしい表現方法を学習することもできる。グループの中で相互に作品を紹介してお互いの出来栄えについて意見交換をしたうえで、クラスや学年で歌集もしくは句集を発行する。彼らの作品を教室に掲示するだけでもよい。さらに歌会もしくは句会の形式を授業に導入することも可能である。希望者には、新聞や雑誌への応募を勧めるとよい。

ここでは韻文の授業を例にして具体的な指導過程を紹介したが、特にサブカルチャー教材を扱う際にはグループ学習という形態を生かすことをぜひ工夫したい。一斉授業によって、教師が作品を読んで解説を加えることに終始するような学習指導の在り方を改善するためにも、サブカルチャー教材の意義は大きい。

4 サブカルチャーによる授業開発の課題

浜本純逸は「国語教育の課題・二〇〇七年」¹において、国語教育の今後の課題について、大きく9点に分けて提言をした。ここでこの提言に注目してみたい。浜本がこれからの国語教育の課題として指摘した9点²とは、以下の点である。

- ① 文字教育と語彙指導の充実。
- ② 思考力を育てること。
- ③ 「言語について考える」習慣と力を育てること。
- ④ ことばによる表現力を育てること。
- ⑤ メディアリテラシーの教育を国語科にどのように位置づけるか。
- ⑥ コミュニケーション能力を育成すること。
- ⑦ 「言語を相互作用的に用いる能力」を育てる国語科教育の方法を探求すること。
- ⑧ 国語教育と外国語教育の関係について考えること。
- ⑨ 国語科教育の学習材をどうするか。

本研究では、サブカルチャー教材を開発したうえで、それを扱う授業開発について、実践に即して論述してきた。ここに掲げられた9項目の今後の課題を確認すると、本研究に

において重視してきた問題が多く含まれている。

第一の「文字教育と語彙指導の充実」、および第三の『「言語について考える」習慣と力を育てること』に関しては、第7章の『「文化」と『ことば』を結ぶために』で扱った授業で目指したところである。特に「ワードハンティング」「フレーズハンティング」と称する実践において、文字教育と語彙指導の充実を図ってきた。そして「ことばと文化」と題した単元学習においては、まさに「言語について考える」習慣と力の育成が主要な目標であった。そして「ワードハンティング」に現代中国語を含めたことは、第八の「国語教育と外国語教育の関係について考えること」と、一部ではあるが関連している。

本研究において取り上げた授業では、表現に関連する活動を必ず取り入れている。第四の課題は「ことばによる表現力を育てる」であり、論文では続けて「そのためには、すべての国語学習の中に表現活動を取り入れることである」と述べられている。わたくしもまた、本研究全般を通して表現活動の重要性を指摘した。特にサブカルチャー教材を扱う授業では、学習の過程および総括の場面において、常に学習者の表現活動を取り入れることを工夫したい。それはそのまま、第二の「思考力を育てる」ことにも関連する。毎時間の授業で考えたことを「授業レポート」に書いてまとめるという活動を通して、思考を整理しまとめることができる。表現の活動を取り入れることは、一方では思考力を育てるという点にも配慮された活動である。

第五の「メディアリテラシーの教育を国語科にどのように位置づけるか」という課題は、まさにサブカルチャー教材が提起する課題でもある。本研究では、第1章の第2節において、メディア・リテラシーの観点から論述したが、サブカルチャー教材は、多くが映像や音声などのメディアに関わるものである。それを用いた授業は、メディア・リテラシーの問題と密接に関連する。さらに第6章の第1節で扱った携帯電話に関しても、メディア・リテラシーの範疇に位置付けることができる。前掲論文³において、次のような指摘が見られる。

eメールやケータイが単なる通信手段としてだけでなく共同想像（文学創造）及び共同思考（世論形成）の場になりつつある。これは新しいリテラシーである。（中略）この「新しいリテラシー」を国語科教育の内容とするには、「見ること」を指導内容として包摂するなど、国語科教育の改編と新しい構造化が必要である。

ここで浜本が指摘した「見ること」に関しては、新しい国語科の学力として考えられつつある。サブカルチャー教材で育成する学力を考える際に、「見ること」を主要な学力としてとらえる必要がある。

次に、第六の課題「コミュニケーション能力の育成」に関しては、本研究で取り上げた授業の多くの場面で配慮したことである。特にグループ学習を展開する際に、グループの中での話し合いを通して協力して一つの課題に取り組むという活動の中で、十分に育成されることになる。第2章の第1節を中心として、わたくしは「インタラクティブ（双方向性）」ということばを用いてきたが、授業中の双方向的なメッセージの交流は、コミュニケーション能力の育成に深く関わっている。

第七の課題の「言語を相互作用的に用いる能力」に関しては、以下のような指摘がある。

国語学習では知識の伝達や蓄積に終わることなく、言語生活に生きてはたらく言語能力を育てることをめざしたい。（中略）解決すべき課題を設定して探求の計画を立て、

様々な資料を集めて読み解き考察し探求の成果をまとめて発表する。という一連の問題解決活動の中で「言語相互作用的に用いる力」は育つ。問題に応じて様々な資料を集めることが必要になり、非連続型の資料も読み解き関連づけて使わなければならない。

この「探求学習」は、特に本節で改めて言及した「総合性・関連性」を生かした授業において顕著に実現される。特に「非連続型の資料」の中には、サブカルチャー教材も含めて考えることができよう。本研究で目指した授業のスタイルは、まさしく「知識の伝達や蓄積に終わることなく、言語生活に生きてはたらく言語能力を育てること」を目標としたものである。

国語教育の今後の課題として、第九には「国語科教育の学習材をどうするか」という点が掲げられている。論文の中で浜本は古典教材を取り上げ、日本の古典、東アジア三国の古典、そして世界の古典という三つの層を提案し、「それぞれの層の古典を見出し、共通の言語文化を共有できるような古典教育を構想していきたい」と述べる。国際的なスケールの教材観であるが、本研究において取り上げたサブカルチャー教材も、まさしく国際的な広がりをもつものである。今後さらに視野を広げて、国際的に魅力ある素材の教材化を目指す必要がある。

本研究では、サブカルチャー教材を用いて育成される主要な国語科の学力として、「言語化能力」を位置付けてきた。この学力はさらに脳科学の研究からも科学的に追究することができる。入部明子はガブリエル・リコーの左脳と右脳の性質に関する研究を紹介しつつ、次のように述べている。

一般的にイメージのような感覚的作用は右脳が、イメージされたものを数や文字にしていく言語記号的作用は、左脳が行っている。(中略)右脳にある「見えない思考」を左脳で「見える思考」にするためには、忘却を避け、できるだけ短時間にイメージを文字のような記号にする工夫が必要である。⁴

本研究で取り上げてきた実践は、たとえばアニメーションの映像からイメージしたことを表すことばをメモするという活動に象徴されるように、「見えない思考」を「見える思考」にする試みが含まれていた。この点を国語科の学力論とからめて追究することは、今後の課題である。

ここまで、浜本純逸の指摘に即して、本研究における授業開発の側面について検証を試みてきた。サブカルチャー教材を用いた授業開発は、すべて浜本が指摘した「国語教育の課題」と何らかの形で対応しているところが明らかになった。21世紀の国語教育を考えるに際して、サブカルチャー教材を用いた授業をより積極的に活用していきたい。

注

- 1 児童言語研究会『国語の授業・200号』（2007. 6）に集録。
- 2 「国語教育の課題・二〇〇七年」の中で浜本は、具体的な事例に即して9項目を提示している。以下は浜本論文からそのまま引用したもので、表記は論文中のものである。
- 3 「国語教育の課題・二〇〇七年」（児童言語研究会『国語の授業・200号』2007. 6）。以下、本節における浜本の引用はすべてこの論文による。
- 4 入部明子『論理的文章学習帳』（牧野出版、2002. 8）。